

第一章 大発見はコロンブスの卵から 9

医療に革命を巻き起こす夢の細胞／ネーミングは重要、「iPod」もヒントに!
!／細胞を若返らせるタイムマシン／細胞の時計の針を巻き戻す／六十兆個の細胞すべてが三万ページの同じ設計図を持っている／DNAの塗り潰されたページ／信じられないほど簡単にできたiPS細胞／十万个からまず百個へ絞り込む／学生時代、父の工場の在庫管理をした経験が役立った／ついにヤマナカファクターを発見／「小林・益川理論」もコロンブスの卵だった「破れ」のおかげで宇宙は存在する／「諦める」ということが最も重要な作業だった／嘘じゃないかと言われた四個と六個／論文発表の直前に起きた一大アクシデント／世界との激しい情報戦／ワクワクするのは難問と格闘しているとき／ヒトiPS細胞の誕生の瞬間／数ミリの皮膚からiPS細胞が作れる

第二章 「無駄」が僕たちをつくった 51

宿題をやったことがない小学生／二人とも自営業の家でほったらかして育った／国語力は全ての基本／父親の影響力／十回以上骨折したことで整形外科医を志す／今、名古屋で科学が作られている／計算が速くできることと数学への適性は関係ない／高三の夏休みまでクラブ活動を続ける／フラフラ癖と浮気性／じっとしていてもロマンはやってこない／片っ端から売りこみの手紙を書く／弱小研究室だから「逆」を狙った／直線型の人生と回旋型の人生／一見無駄なものに豊かな芽が隠されている

第三章 考えるとは感動することだ 83

益川式記憶術／抽象化と具体化、二つのアプローチ／ビックリできる感受性／犬の実験で大興奮／「ビックリ」からiPS細胞が生まれたこと／癌の遺伝子研究からiPS細胞へ／仮説の中率は二割以下／人間の考えることなんかより、自然のほうが奥深い／歩きながら考える／寝ている間に思考が進む?／三日間不眠不休で考え続けた

第四章

やっぱり一番じゃなきやダメ

109

三十年がかりの証明／実験物理は稲作民族の日本人向き？／トップクオークは「あるに決まっている」／二種類のリーダーがいる／思考の攪拌作用／凡人でもいい仕事をするには／湯川先生の第一論文に間違いが!?／「秀才病」の研究者／ヒトと金の物量作戦のアメリカ／アイデアと創意工夫で勝負／プレゼン力と発信力の重要性／アメリカのキャンパスでプレゼンを学ぶ／プレゼン力で人生も変わった／正確に相手に伝えることの価値／日本の科学者の幸福度／科学立国のお寒い現状／やっぱり一番を目指さなければダメ

第五章

うつと天才

147

挫折と失意の研修医時代／挫折を知らぬ人生／共働きの子育て／マウス世話地獄／「アメリカ後遺症」に苦しんだ日々／「うつ」との長いつきあい／目標は高く、行動は着実にできることから／ボスから教わった「VW」／人間万事塞翁が馬／天才はちゃんと推敲も出来る人／天才と数へのこだわり／織田信長Ⅱ人物Aで十分／走ること

終章

神はいるのか

175

科学遊びでなく本当の科学を／入試はもっとシンプルにすべき／エセ科学の蔓延——超能力を信じ込む科学者／「積極的無宗教」のすすめ／ないものを信じさせる宗教の「嘘」／科学とは、「肯定のための否定の作業」の連続／自然の方がはるかに独創的／生命発生の研究は、人類に残された最後のロマン／iPS細胞と人類の未来／一日も早く薬を患者さんに届けたい／科学者として超えなければならぬ壁／まだ気付いてない「コロンブスの卵」たち